

市史講座第3回ミニレポート

6月15日(土)第3回の講座が開かれました。

第1部：「出雲国風土記に見える神社と村落」(講師:島根県立古代出雲歴史博物館専門学芸員 森田喜久男 先生)



森田先生は、「神々の国、出雲」というイメージが強いが、それでは古代出雲の本質を見失うとして、古代出雲における仏教の展開についてお話されました。

まず、『出雲国風土記』に記載されている「新造院」を取り上げられました。「新造院」が『出雲国風土記』という公的な書物に「〇〇寺」と書かれていない(書くことができない)ということは、寺として国家に公認されていないためで、それでも「新造院」と書かれているということは、国家に公認されることを希望しているためではないかとされました。

つづいて、『出雲国風土記』に記載された松江市域の寺院として、意宇郡山代郷に二つの「新造院」がみえるが、それらを建立した人物は出雲神戸に関わりのある日置君鹿麻呂を祖とする日置君目烈と、のち

に出雲国造となる出雲臣弟山であり、二人とも神職でありながら仏教にも深く帰依していたとされました。

また、他国に比較して出雲は瓦葺きの寺院の造営が遅れているとされているが、それは出雲という地域社会の意思ではなく、むしろヤマト王権や中央政府が、出雲を「神々の国」に仕立て上げようとした結果なのかもしれないとされました。

第2部：「いわゆる「慶長日本総図」の誤認を解く」(講師：元山口大学教授 川村博忠 先生)

川村先生は日本における国絵図研究の第一人者です。本講座では江戸幕府が開府して直後に編纂された「慶長国絵図」について話されました。

江戸幕府が中央政府として治めた260余年の間、全国ないしまとまった地域から国絵図を集めたのは、慶長9年・寛永10年・寛永15年・正保元年・元禄9年・天保6年の計6回でした。

このうち、初回の慶長国絵図は、従来、江戸初期の日本図として、国立国会図書館所蔵の「日本図」がいわゆる「慶長日本図」として広く知られていました。しかし、このことは未だ未解明というべきで、その真相は明らかではありませんでした。



川村先生はこの「慶長日本図」が真に慶長期の絵図であるのかどうか、全国各地の絵図を探訪し、またこれらの関連する古文書・古記録を採取され、「慶長国絵図」と称されていた国立国会図書館本は誤認であり、正しくは島原の乱直後に軍用的観点から作成された「寛永十五年日本図」であることをお話になりました。

絵図だけでなく、例えば毛利家文庫(山口公文書館)の毛利家江戸留守居役『公議所日乗』の一文や、広島藩の記録から確認されるなど、これまでの調査による実証から導き出される結論の過程を詳しくお話になりました。